安部竹子の俳句

日野雅之

〔キーワード　俳句　俳誌「城」　山本村家　盛岡高等農林学校〕

一　はじめに

平成九年十一月に出版予定の「島根県歴史人物事典」（山陰中央新報社刊）の「安部憲吉」の項の原稿によれば、次の通りである。

明治二八年（一八九五）～昭和五三年（一九七八）　島根県農会技師、横田町長

仁多郡横田村（現横田町）の地主の家に生まれた。松江中学、盛岡高等農林学校卒。一年後輩に宮沢賢治が在学していた。松江中学教諭を短い期間勤めたが、大正一〇年（一九二一）島根県農会に入り、昭和一三年（三八）まで約二〇年間勤務した。農会は御用団体ではなく農民の自治団体であるとの信念をもち、『島根県農会報』に論陣を張り、島根県農会に「安部あり」といわれた。恒松於菟二会長時代の昭和七年に、農民の郷土愛を蘇らせようと農会報に各郡別の特集号を組んだ。それは町村農会技手に執筆させたもので、農業の機械化と科学的栽培法、品種改良、農産物の出荷などを取り上げて農民の自覚を呼び起こそうとした。農会退職後は俳誌『城』の同人になり、俳号竹子の名で句作に励んだが、推されて一六年に横田町長に就任した。戦後、島根県教育委員、横田町農協組合長等の公職を歴任。晩年は俳句を友として余生を過ごし、六〇〇〇句を編年風にまとめた『わが俳句』を残した。（高橋　一郎）

▽参考文献＝『島根県農会報』

大正初年、農林関係の名門校は、盛岡と鹿児島、島根県人は盛岡へ入学していたようである。憲吉は盛岡高農二、三年生（大正四、五年）の時は、校友会々報の八名の編集委員の一人になっている。詩「冬の夕暮れに」、浪漫風の短編小説「ポプラの追憶」、「第八回陸上運動会の記」、抄録「種子検定」、短歌「丘の白樺」二十七首、学術論文「島根県に於て見たる共済法成の好実例」、抄録「緑肥の種子発芽に及ぼす有害作用に就て」、短歌「小さき花」二首、雑録「農村源泉論」などを憲吉は発表している。「農村源泉論」の掲載されている三十三号（T六・

三・十六）には、宮沢賢治が銀縞というペンネームで短歌十四首を発表している。校友会々報については、校本宮沢賢治全集第十四巻によった。島根の後輩達に憲吉は賢治の風貌を伝えている。

この稿では、花鳥諷詠、客観写生を唱えるホトトギス系俳誌「城」の昭和十年前後の同人、安部竹子の俳人としての活躍ぶりを論じてみたいと思うところである。政治家、農政人としての安部憲吉については、内藤正中先生をはじめとして編集された「横田町誌」に詳しく述べられているが、それについてもすこしは述べてみたい。

二　島根県農会の実力者

島根県農会は農会法により明治二八年に設立された農事改良団体で中央、府県、郡、市町村の段階の系統組織の機構であった。国の農業政策に対しては農民の側に位置し、それを代表して農業政策を批判し、これに要望するというものであった。憲吉は主任技師兼幹事であった。

昭和十八年、産業組合とあわせ農業会に改組。島根県農会の機関紙が島根県農会報である。島根県立図書館と島根大学附属図書館にすべてではないが保存されている。憲吉が組んだ各郡別の特輯号など、当時の各郡の生活の様子が手に取るように理解出来る。例えば、周吉郡中村（現・隠岐郡西郷町中村）などは毎日の勤労意欲の為に「禁酒村宣言」を行っているなど面白い。そして月刊の農会報の巻末には「文藝」欄があり、米村あん馬選の「縣農柳壇」、憲吉の句友で、松江から発行されている俳句誌「城」（しろ）の同人で、花鳥抄（課題句選）の選者である俳人、安達赤土（松江理容美容専修学校初代校長）選の「縣農俳壇」が毎回掲載されていた。どちらも課題句の選であった。二六才から四四才まで島根県農会に勤務し、島根県農会報を編集した。その成果は人物事典の通りである。

盛岡高等農林学校農科時代、憲吉は全教科平均九十数点で成績はトップであったと、憲吉と同じ横田町出身で盛岡高農の後輩である妹尾信雄氏(元横田高校長・農学博士・大正12年生)は語っておられる。文武両道の人でスポーツは万能であったという。「妹尾君、僕は音楽だけが出来ない。音楽が出来ていれば人生がまた変わっていたかもしれない。」と言われたという。この才気溢れる人から見て、一級後輩の宮沢賢治はどう映っていたか、「何かぼーっとしていて、昼行灯のような、冴えない感じの男だったのになあ。」ということであった。賢治とは別世界の人であったのだろう。「まっすぐに伸びて曲がるな今年竹」という自作の句をよく披露したと言うからこの句が俳号、竹子（ちくし）の由来かもしれない。猪突猛進のタイプで「自分は長い短歌より短い俳句の方が向いている。」とのことであった。

昭和三十一年十月一日から昭和三十三年九月三十日まで島根県教育委員に任命され、その折、島根県教育委員会から発行されている教育月報、島根の社会教育、教育調査統計速報が忘れた頃に届くことに不満で、半ば命令的に、三つの冊子をまとめて「島根県教育広報」として旬刊として発行することを提案した。昭和三十二年四月から発行され、現在に続いているが、近年は月刊となっている。以上、妹尾信雄氏から伺ったことである。発行当時の「教育広報」にやはり安達赤土選の俳壇欄が設けられていて、憲吉の影響がうかがえる。

三　横田町長就任、見識と勇気の町政

昭和十六年、自営の農業に精を出していた安部憲吉は、全町会議員より、欠員中であった町長に就任方の申し入れを受けた。任期は昭和十六年十二月十九日から同二十年十二月二十日までの四年間で、太平洋戦争とともに町長の職務が始まり、且つ終わったことになる。横田町誌追録に「戦時下の横田町　安部憲吉」という文章があるがその中に、「戦死公報は聯隊区司令部、所属部隊長から町長あて電報通達された。その度に心を暗くした。公報をうけとると、兵事係をして即時その家に行って伝達させ、つゞいて町長が行って弔意を表し、慰問の言葉をのべた。『名誉の戦死』という言葉を必ず使ったけれど、心の中のどこかに、我とわが舌に抵抗があって、いつもきゝとれぬほどの低音になった。家の中の嗚咽の中に眼をつむっていた。」という文があるが、当時の地方の政治家の中には先見の明があるというか、真理から目を逸らさないといった感じの人が少なくなかったように思われるが、そのような才気の人物でなければ、戦時の町村長は勤め上げることが出来なかったであろう。

当時、隠岐の中条（なかすじ）村村長であった若林通照（みちてる）氏は後に、初代西郷町長となった人であるが、戦時中、出征兵士が数名、隠岐から出てきて、松江市の大橋川の河畔にある野津旅館に泊まっている時に居合わせ、出征兵士に夕食を馳走し、「国の花と散れ！などと世間は言うが、君達が死んでしまったら、隠岐の島は復興出来ないではないか、絶対に最前線に出てはいけない、そして必ず生きて帰って来なさい。私と一緒に隠岐の島を発展させましょう。」と言われたということを元出征兵士の一人の方からうかがったことがあるが、安部町長と相通じるところがあるような気がする。

また、昭和二十年春には、安部町長は、海軍に呼び出され、弓ケ浜の練習航空隊を横田町に移転する、長さ二キロ巾三百メートルの滑走路を作る、家屋は四百戸分を明けてほしい、という命令を受ける。「戦争四年私のうけた最大のショックであった。これでこの町は焼土にならぬまでも、巾三百メートルのコンクリート舗装が出来たら、戦がもし終わっても再び耕地は還らぬと考えて悲しかった。」しかし、その計画は中止された。木次線の輸送力では一年以上かゝり役に立たぬとのことであった。「戦禍にひとしい災厄をうける危機一髪の際どい瀬戸際で、この町この郷土を救って呉れたものは、思いも懸けぬ劣悪な輸送力、のろのろ列車そのものであった。これは私一人が知っている秘密である。」と憲吉は「横田町誌」（昭和四三年九月刊）で述べている。

また、こんなエピソードも記してある。

昭和十九年（終戦の前年）横田町に戦争中最高の割当量、一万俵の供出が命ぜられ、安部町長は農民に、決して飢えさせはしない、命をかけて誓う、と述べ、農民に供出をお願いし、その後農民に独断で百通の米の配給通帳を発行し、県庁に責められ、警察当局の心証を害した。また、二十年秋、雨で不作。農業会の駅前倉庫に保管してある供出米が千九百俵あることを知り、戦争が終わった今、どこの所有米か疑義を持ち、松江の農林省食糧事務所に出頭して、保管米の原簿の記載を見ると、七月某日の日付で、某軍需工場へ払下済で、横田町倉庫はその日付で保管米はゼロとなっていた。帰途の夜の列車で考えた。「私にとって所有者不明の米である。この米を利用して一時農民を食

いつながせ、天候回復を待って直ちにそれを返せば、『横領』には類似するが、少なくとも管理令を犯すことにはならない。私は汽車にゆられた三時間の末、この様に結論した。」（横田町誌）。約三百俵を貸し付けた。後のことを考え、貸し付け経過を克明に記録していた。「警察は私に対するこれまでの心証から、江戸の敵を長崎での方式の工夫をしている。米の事件をそのため選挙運動の事件に変造デッチあげようと企て、この『作り話』を検事局に持ちこんでいるのだ。」（横田町誌）。事件は不問にされた。「別れる時に検事は『貴方は用心のよい人だ。自分で自分の行動の正しさを裏づけながら危ないことでも安全にやりとげる人間だ。だから警察官などの歯がたたぬ。警察の貴方に対する心証がひどく悪い理由がわかりました』と後ろから話しかけた。」と「横田町誌」で述べている。激動と波瀾の町長時代を安部憲吉は終えた。

四　竹子俳句の鑑賞

現在、山陰を代表する俳誌である「城」に竹子が投句をしたのは昭和七年四月からである。主宰は俳誌「ホトトギス」の課題句選者をしたこともある安来の山本村家（そんか）、昭和三年の創刊時よりの選者である。高浜虚子は村家逝去の折、「これよりは山陰道の月暗し」の弔句を贈っている。虚子著の「進むべき俳句の道」にも村家は紹介されている。安来の清水寺には「坊々へ飛び石伝ひ月見かな」の村家の句碑があるが、この句は松江の普門院で詠まれたものである。

学問の窓に懸けある大根かな　　昭和十二年　三月

「学問の」と詠まれると、山口誓子の「学問のさびしさに耐え炭をつぐ」を連想するが、竹子の座五は「大根」である。東北の冷害に苦しむ農民を如何にして救うか、如何にして希望を持たせるか、土壌の研究などの実学をしながら、考えていた後輩の宮沢賢治、横田の農民を常に思っていた竹子、盛岡高農魂とでも言うのであろうか、学問の為の学問ではなく、生きる為の学問とでも言おうか、「学問の窓」と「大根」の取り合わせ、盛岡高農出身者らしい俳句で、竹子俳句の代表作と言えるであろう。

湖の出水来てゐる鳥居かな　　昭和　九年十二月

現俳壇の大家、境港出身で「夏炉」主宰の木村蕪城の次に並んでいる句である。五月雨が激しく降り続き、河川、池、沼があふれて氾濫する。これが出水である。湖は宍道湖であろうか、氾濫した湖水が、湖のほとりの松江の町にあふれかけている。松江大橋の北の須衛都久神社の鳥居近くまで来ているのであろうか。水害という異常事態ではあるが、宍道湖、神社の鳥居という風情のある水の都、松江の一点描といえるであろう。

園丁の鶴呼んで居り園の秋　　昭和　十年十二月

「丹頂のくくと物云ふ秋の風」「駈けて居る丹頂あまた園は秋」と並ぶ第一句で「岡山後楽園三句」と前書きがある。「園丁」は後楽園で働く動物係のことであろうか、「園丁」と「園の秋」の「園」の繰り返し、

後楽園の美しい秋と鶴との取り合わせが、美しい格調のある作品となっている。

龍膽に汽車はやうやく下りかな　　昭和十一年　二月

「山陰線所見」という前書きがある。龍膽（りんどう）は、伊藤左千夫作「野菊の墓」で、「政夫さんはりんどうの様な人だ」という、凛としたものを持つ秋の花である。蒸気機関車が黒い煙を吐きながら、峠を苦しそうに走って行く。やっと汽車が峠にさしかかり、下りとなる。汽車の音も軽快となり、高原にさしかかると、龍膽の花が目に止まった。汽車の音と龍膽との爽やかさが思われる佳句である。島根県農会の幹事として、県内、県外を東奔西走した竹子は、そのうちにあっても、窓外の龍膽に目を馳せるという風流心を持っていたのである。

初荷馬飾られて居て叱らるゝ　　昭和十一年　三月

初荷を負った馬、「飾られて」いるのに「叱らるゝ」という意表をついた対照の表現が面白い。

水底は一枚の岩柳鮠　　昭和十一年　九月

柳鮠（やなぎはえ）は春の季語で、学名ではなく、長さ七、八センチほどの鯛（うぐい）などが柳の葉に似ており、この名があるというが、柳鮠を川に見つけ、よく見れば「水底は一枚の岩」となっているというホトトギス系の写生俳句の典型と言えよう。さらりと詠んでいるところは選者の山本村家の句風と通じるものがある。動の春の川と静の一枚岩の対比が印象的な句である。

放つ矢の一瞬の白夏芝に　　昭和十一年十一月

弓道場において、的と矢場の間にある夏芝、その青々としたなかに「一瞬の白」の矢が飛ぶ。中七の「一瞬の白」と「夏芝」のさわやかな取り合わせが、高浜虚子の「青嵐机上の白紙飛び尽くす」を思い出させる。文武両道の竹子、弓道の心得もあったのかもしれない。

岸壁の北風にトロール網を積む　　昭和十二年　五月

北風は「きた」とも読む。トロール漁法は、学問体系化されていなかった漁法で、厳しい徒弟制度の漁法であった。その漁法に加えての北風の冷たさ、北国の生活の厳しさが感じられる句である。竹子の専門の農業と同じ第一次産業の生活の厳しさに共感を寄せている句である。竹子俳句に流れているものは、「力強さ」である。

夏空へ異人商館旗をあぐ　　昭和十二年　十月

神戸海岸通り、という前書がある。活気のある夏の空、そして、エネルギッシュな、エキゾチックな雰囲気を醸し出している異人商館、その夏空に異国の旗がへんぽんと翻っている雄々しさ、竹子のエネル

安部竹子の俳句（日野）

ギッシュな行動力と相通ずるところがあり、竹子の前向きの意欲がかきたてられたであろう光景である。高農時代、成績トップの憲吉に続け、と横田人の後輩達も成績上位で頑張ったと言われるが、竹子は英語が得意であったという。ＧＨＱが横田町を訪問した際、竹子はわざと山着を着て、英語などわからぬ田舎者をよそおって、最後になってペラペラと英語でまくしたて、ＧＨＱをびっくりさせて面白がっていた、ということである。英語の得意な竹子であるが故にすぐに異人商館も目についたのであろう。

著莪咲けり高原の道草に消ゆ　　昭和十二年十一月

著莪（しゃが）は夏の季語で、山野の日陰に群生するアヤメ科の常緑多年草。高原の日陰に咲いていた紫まじりの白い著莪の花々、梅雨時期とはいえど、からっと晴れた横田町の高原を思わせる。しかし、その高原の道は、生えるにまかせた夏草に閉ざされている。西洋画でも見るような風景であり、当時としてはしゃれた感覚の俳句ではなかろうか。

元日の松藾鳶を生みにけり　　昭和十六年　一月

特別作品、山河迎春三句の一句。他の二句に、城址という言葉が入っており、松江城山の松藾を想像してよいだろう。着物姿の竹子が元日の松江城山を散策、ふと見上げると、松藾の上を鳶が高く舞っている。松藾は松風の音。松の緑は、この世の繁栄を寿ぐめでたいもの。そのめでたい松風の音の中から鳶が現れたということを「生む」というこれも又めでたい言葉で表現している。「生みにけり」という座五の表現が佳句をもたらした。

花鳥抄（課題句）安達赤土選

沼暮れてそこらは虫となりにけり　昭和　九年十一月

巻頭三句の第三句である。虫は秋鳴く虫の総称。沼は湖を小さくしたような所、農業用水の溜め池を言うこともある。人里離れた山の中腹あたりにあることも多い。もの音一つしない沼が暮れかかる頃、秋の虫が鳴きだしはじめる。そのうちに一斉に虫の大合唱、虫の声とともに深まってゆく沼の秋の夕景が彷彿として来る。

大地灼けうつむける顔貨車を押す　昭和十二年　九月

巻頭三句の第一句である。あとの二句は、「貨車を押すゆがみし顔の汗あはれ」「貨車を押す肉塊汗を陽に噴けり」である。生活、労働を詠んだ歌人、石川啄木は、盛岡中学での賢治の約十年先輩、賢治は「一握の砂」に刺激を受けて、短歌の制作に文学への一歩を開始した。賢治も生活、労働を詩に詠んだ。。この巻頭三句も竹子の生活俳句である。文学とは、人生いかに生くべきか、を追求するもの。この三句は竹子の労働讃歌と言えるのではなかろうか。

炭舟のおくれし一の瀬にかゝる　　昭和二十四年二月

並ぶ句が「炭舟に江川雪となりにけり」であり、江川の風景である。ちなみに「炭舟に・・」の句、冬の季語の炭と雪があり季重なりでは、と思われるが、こういう場合、炭舟が句の中心であり、雪は江川の状況を表現している単なる素材だけである、ということである。炭舟は奥山から出した炭俵を舟に乗せ、川を下って平地部で商うものであろう。

「炭舟の・・」の句であるが、「おくれし」という措辞によって何艘かの舟が下っていることが想像できる。そして、一の瀬は少しは難所のうちに入るのではなかろうか。「一の瀬にかゝる」で、重い炭俵を積む舟の安定は大丈夫であろうか、と作者の不安がよぎるなかで生まれた動きのある佳句である。炭を焼く山の人々への思い、江川に生きる人々への思い、山陰地方に生きる人々への竹子のエールである。

竹子の盛岡高農時代の一級後輩に倉吉生まれの河本緑石（義行）がいる。賢治らと共に、同人誌「アザリア」を発行、また種田山頭火も投句していた俳誌「層雲」にも俳句を発表、「あらうみのやねやね」という自由律俳句があるが、これも山陰地方に生きる人々へのエールである。

五　俳誌「城」と竹子

晩年の竹子句集「わが俳句」があるが、ここでは、山陰の雄であった俳人、山本村家の選で竹子が三十代、四十代の頃の俳句を鑑賞した。花鳥抄選者の赤土氏は、理容店も営んでいたが、実業家同士という点からであろうか、「城」百号記念の大会吟行のスナップ写真を竹子が担当しているが、タイトルに「ハロー、好男子赤土氏」等とあり、縣農俳壇選者でもあり、花鳥抄では竹子は常に上位に位置していた。

別のタイトルには「公会堂を写生する村家先生」とあり、「そーっと後ろから忍び寄りました。潦（にわたずみ）を距てたのは、潦にはまるのを嫌ったのでなくて、無帽の村家先生のお頭の照り返しから起こるハレーションを恐れたのでした。」とあり、茶目っ気ぶりを見せている。また、昭和二十一年に刊行された山口誓子の第五句集「激浪」について、「城」誌上で舌鋒鋭く、しっかりした文章で評論している。戦後は、「城」の二句鑑賞欄を担当執筆している。

昭和十二年六月号は百号記念号であるが、竹子の文が掲載されているので紹介する。

百號句會斷想　　安部竹子

×

地方俳誌で百號を壽ぐといふのは、文字通り「稀有」だと聞いて居る。さすが「城」はその名稱から聯想させる安定感をその儘、よくおちついて、さりげなく百號を迎へて仕舞ったものだ。「城」の創刊から今日まで直接世話にあたられた方々にとっては、決して、左様に気安く迎へられた百號でもあるまいが、途中から「城」へはまりこんだ私等にとっては、全く「いつのまにか」来て仕舞った百號であった。親

安部竹子の俳句（日野）

稼ぎ、子長者といふが城にとっては、私等のごときは、正に子長者組の苦勞知らずであったことを、そして又この子長者流の苦勞知らずで俳句を習ったことをつくづく幸せに思ふが、同時に又苦勞知らずの俳句修行が、結局は物にならぬかも知れぬことを、ひそかに恐れて居る。どうせ御多分に洩れぬだらふと今から諦める心構へである。

×

「城」と云へば濠をめぐらした石垣があって、その上にお天守がある風景を聯想するが、元來そんなのではなくて、「城」とは「都邑を防備し、人民を保護して盛んならしむるために設くる土の堡壘、故に土篇をもってし、成は國土を成就するの義である」――と、もの丶本に書いてある。われ等の俳誌「城」の名前が決定する時に、どんな論議の結果この名稱が決まったか子長者組の私どもは知らぬ。けれども恐らく、松江、千鳥城、それに、古い昔の天守閣といふものに對して起こる懐古趣味や淡い感傷といふ位なところで、決ったと想像されるが、われ等のグループを包む俳誌に、いみじくも付せられた名前である。

われらの「城」の壘の中に、山本村家先生を指導者と仰ぐ城一團のグループは、その俳句を磨き、その句心を練って來たのである。廣野に捨て丶あったら、何の育ちもし得なかったであらふ句材も、句心も、「城」の中に育まれてこそ俳句を知り俳句となった人々が、われ等の城一團の中には尠からぬこと丶思ふ。われ等の「城」はわが地方の俳壇に於いて、いみじくも、またゆくりなくも城の本義を顯現して來た。名が實を示したものとみても強ちこぢつけでは無からふ。

×

城百號を壽ぐ五月二日の句會は、その名稱に因んだ城――松江城の下でそのプログラムを擴げた。

人の世の俗事にか丶はらぬ集まりは、何と心豊かなものである。木瓜に佇む人、からたちの藪中に白い殘んの花をのぞく人、車井の綱にとまる花屑に心をとめる人――これ丈でも心の清澄を感ずるが、滔々たる人の世のあがきの中に、云はゞこんな一文にもならぬ自然の些事にひかれて集まる人々の一群が、よしポツんとでも、現實に存在することを考へてみれば、ずい分愉快なことである。

大會の披講のあった會場で、としを氏の獨特の階調ある披講をきいてゐる時、村家先生の句切り句切りに唇を固く閉ぢては、次へ進まれる彼のほ丶笑ましい咄辯をきいて居る時、百號のよろこびといふ普遍的なもの丶外に、しみじみと人生の豊かさを感じたことであった。

總じて「集り」は人の世では「闘ひ」である。笑ひは笑ひの中に、ゼスチュアはゼスチュアの中に、虚々實々征服の闘ひに火花が散る。けれども、俳句の集まりは、斯くの如き俗性の片鱗もなくて、悉く第一義でである。偽装、迷彩はその痕跡をも置く場所がない。一句の十七文字は舌頭の音波に聽くのではなくて、心の琴線にきく音律である。人の心の深處の極みのふれ合ふのである。

×

「城」を百號までつゞけたこと、これは決して落花の行衛を見送る

様気樂な業ではない。編輯、發行、經濟といふ、凡そ花鳥の世界、諷詠の天地とかゝはりのない人の世の俗務である。俳句のためにこの俗務を負擔して行くことは、句を味ふ境涯の尠からざるハンデイキャップである。然し吾等「城」とその一團の俳境のためには、このハンデイキャップは缺ぐを得ぬものである。必須の犠牲である。この犠牲を敢へて負擔して來られた人々は、「城」の先輩たちのうちでも、殊に吾等の集團が感謝を吝しまれぬ人々である。大會當日村家先生の言葉の中にもあったが、曩には安達赤土氏があり、現に中田十四夜氏があるわれ等の指導者村家先生には無論のこと乍ら、城百號の壽ぎは先づこの人々に最も重く捧げられてもよいのである。プラットホームに立つ旅行者は、走りこむ機關車にはすぐ注意しよふが機關車が列車につながり、列車と列車をつなぐ連結機には注意するものは仲々あるまい。俳句人に於ける俳誌は、この連結機である。故を以てこの連結機の役割を奉仕した人々には、心から感謝が捧げられねばならぬのである。

文　献

俳誌「城」（昭和三年～昭和二十四年）

島根県農会報（昭和八年～昭和十三年）

校本宮沢賢治全集　第十四巻　筑摩書房

竹子俳句抄（三十句）

俳誌「城」山本村家選、安達赤土選の竹子俳句百五十八句より三十句を日野雅之抄出

踏切の番小屋灯る餘寒かな

蜂の尻ひくひく動く椿かな

（色紙にしても良いと選んだ句の一つと「わが俳句」にある）

風吹けば皆風に向く水馬

眞白なる外国船や秋の暮れ

ともづなを踏めば上がりぬ秋の蝶

廻廊の下の干潟や石叩き

秋風や千畳閣の圓柱

廻廊の真下の闇や月の潮

菜の花や道を曲がれば道成寺

裸子のよちよち走り雁来紅

北風の波おしあぐる江の川

寒林や大きな石のあらはるゝ

枯芦に流れ来て居る落椿

五月雨や植田の中の鳰

賑やかに船波喰ひぬ泳の子

夏蝶の次第に遠し水尾の上

風鈴に七夕色紙むすびあり

安部竹子の俳句（日野）

夜の蟬のぶつかり逃ぐる星の竹
あふち咲き明けたる空に月消ゆる
あふち咲き朝風白き道吹けり
大空の碧四葩より壙ごり来
子燕の巣立ちし朝に霧降れる
鐵扉いまビルの秋燈消しつ閉づ
黒きビルの尖角小さき月をかけ
峡を來て頬白巖をこぼる見ゆ
黒潮は濱木綿咲ける磯うてり
汐荒し濱木綿の葉に日はあれど
飛魚の碧き眼海をひたに戀ふ
足袋白くサーカス乙女綱わたる
小走りに土蔵へ用や萩の雨